2023年度　一般入試
第1回

国　　語

〔注意事項〕

1　問題は一から四までです。

2　時間は50分です。

3　下敷(したじ)きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。

4　解答は，濃(こ)くはっきりと書くようにして下さい。

5　開始の合図があるまで問題用紙を開かず，手を触(ふ)れないで下さい。

6　試験中はよそ見をせず，きちんとした態度で行って下さい。

7　何か物を落としたら，黙(だま)って手をあげて下さい。

8　他の受験生に迷惑(めいわく)となるような行為(こうい)をしないで下さい。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夕すずみ会の翌日から、川村は、［A］、うちへくるようになった。
かあさんは電話をかけて、野菜を取りにくるようにいう。
きたついでに、調理のしかたを教えたり、反対に、川村から沖縄料理を教えてもらったりもした。
台所に立った川村は、昼食に、ゴーヤーソーメンをつくってくれた。
ゴーヤーと、千切りにしたシイタケ、ニンジン、ニラなどを、ツナ缶（かん）といっしょに中華（ちゅうか）なべでいためる。そのなべに、ゆでておいたソーメンを加え、塩味をつけてさっといため、お皿に盛りつければできあがり。
「ソーメンは、かためにゆでるのがコツなんだよ。うちのおかあさんは、海ブドウなんかも入れたけど、このへんじゃ売ってないから」
「海ブドウって、なんだよ。そんなのきいたことないぞ」
「海藻（かいそう）の一種だよ。沖縄でしかとれないんだって」
「おいしそうだねえ。そのうち、わたしもやってみるよ」
できた料理は、とうさんや明穂（あきほ）もいっしょに食べた。ぼくの家族に囲まれて、テーブルについた川村は、a はにかみながらもうれしそうだった。
明穂のソフトボール部は、準決勝まで進んで負けたため、三年生は引退した。
時間のよゆうができた明穂は、受験勉強に取り組み、ぼくと川村の勉強もみてくれた。
電話して、宿題のドリルを持ってくるようにいうと、川村は、最初のうちはいやがった。きても、［B］勉強しようとしなかったが、明穂とは気があうのか、やさしく教えられているうちに、［C］やる気になってきた。
「勉強は積み重ねがだいじだからね。わからなかったら、はずかしがらないで、三、四年の教科書からやり直すしかないよ」
そんなふうに、きびしいことをいわれても、すなおにうなずいている。うちにあった中学年の教科書を借りていき、アパートへ帰っても、自分で勉強していた。
八月の半ばには、地元の神社の祭りがある。
川村は、明穂といっしょに祭りへいく約束をして、夕方近くにうちへきた。
かあさんと明穂は、川村を二階へ連れていき、しばらくおりてこなかった。
そのあと、下へきたときは、三人ともゆかたに着がえている。
「あれ。どうしたんだよ、それ。前に見たことあるな」
ぼくはいい、白地にアジサイのがらがついた、川村のゆかたをながめた。

「よく似あってるだろ。ちとせちゃんが、着物を着たことないっていうからさ。おととしまで、明穂が着てたのを、だしてみたんだよ」
「へえーっ。なんか、川村じゃないみたい」
「こうして見ると、おねえちゃんと妹だね。ふたりとも、きれいでさ」
「わたしも、こんな妹がほしかったよ。弟なんか、うるさいだけだもの」
「妹がいたら、きっと、ゴリラみたいなねえちゃんはいやだっていって、泣くよ」
「そんなことないって。ソフトボールで、バッテリーも組めるしさ」
ぼくたちが、そばでさわいでいるあいだ、川村は、はずかしそうにだまっていた。
それから、いっしょに庭へ出ると、かあさんが明穂と川村の写真をとった。
川村は、自分で自分を見まわしながら、うっとりしているようだった。明穂とならんで、いろいろポーズをとっていたが、そのうちに、突然、うしろをむいてしまい、①両方のてのひらで、顔をおおって泣きだした。
おどろいたかあさんは、そばへいき、肩をだいてなぐさめた。
「どうしたの。また、おかあさんのことでも、思いだしちゃった?」
川村は首を横にふり、すぐには返事をしなかった。
心配した明穂も寄りそって、背中をさすりながら、のぞきこむ。
「だったら、なによ。うちのみんなは、ちとせちゃんの味方だよ。いやなことがあったら、なんでもいいからいってごらん」
「あたしもね……あたしも、できれば、こんな家に生まれたかった」
川村は、ひとこと、しぼりだすようにいうと、つかえていたものが取れたように、大つぶのなみだを流して泣いた。だきしめた明穂もなみだぐみ、そのまま、じっと立ちつくしている。
ぼくも、しんとしてしまい、なにをいっていいかわからなかった。
家の事情はよく知らないが、川村が、ずっとがまんしてきたのはわかる。おなじ小学生の女の子を、こんなふうに泣かせるものが憎く、形があるなら、めちゃくちゃにやっつけてしまいたかった。

盆おどりや町内会が用意した夜店は、八時すぎに終わった。
D、ぼくの家にもどってから、川村はワンピースに着がえた。
かあさんは、ぬいだゆかたをたたむと、帯もいっしょに紙ぶくろへ入れて、川村にさしだした。
「これ。うちじゃ、もう着る人がいないからさ。ちとせちゃん、もらってくれる?」

「え、いいんですか⁉」
川村は、よほどうれしかったのか、遠慮もわすれて、［　I　］をかがやかせた。
「いいんだよ。もらってくれたら、わたしもうれしいし」
明穂もいいそえ、夜店でもらった水ヨーヨーを手わたす。
かあさんにいわれ、ぼくと明穂は、アパートまで送っていこうとしたが、川村は、だいじょうぶだといってことわった。
表の道からは話し声がきこえ、神社から帰ってきた人たちが歩いている。紙ぶくろを、だいじそうにかかえた川村は、げんかんで見送るぼくたちに手をふり、ひとりで帰っていった。
祭りのあとは、町会役員の慰労会があるので、とうさんはもどってこなかった。
あせをかいたぼくたちは、順番に風呂へ入り、縁側にすわってすずんだ。
「やれやれ、祭りも終わったねえ。今年は稲もよく育ってるし、田の神さまも、無事に送りだせそうだよ」
かあさんはいい、遠くの田んぼに思いをはせるように、夜空をながめた。
田の神さまは、稲の取りいれがすむまで村里にいて、冬のあいだは、山へ帰っていくのだという。山には川の源があり、田んぼへ水を送りだしてくれる。だれも神さまを見た者はいないが、無数の星がまたたく夜空をふりあおぐと、ぼくも、どこかで見まもっていてくれるような気がした。
冷蔵庫からアイスクリームを取りだし、三人で食べていると、門柱代わりのケヤキの木をまわり、庭に男が入ってきた。
酔っているのか、足もとをふらつかせ、縁側へ近寄ってくる。
おどろいて、ぼくたちが見まもっていると、それは川村のおとうさんだった。うしろから、ついてくるのは川村で、さっきと同じ服装をしていた。
「おや。どうしたの、ちとせちゃん。なにかわすれ物？」
声をかけたかあさんに、川村は、返事もしないでうつむいた。
おじさんは、ついさっき、川村にわたしたばかりの紙ぶくろを手に持ち、かあさんの前へつきだした。
②「これは、なんだ。ええっ⁉　どういうつもりか知らねえが、うちの子には、ちゃんと、おれという親がついてるんだ。こんなものを、めぐんでもらういわれはねえ」
「ああ、そんなつもりはなかったんだけど……いけなかったですか」
「あたりめえだ！　ここんとこ、下手に出てりゃいい気になりやがって。地元じゃ何様か知らねえが、見くだして、ひとをバカにするのもほどほどにしろっ」
「気にさわったらすみません。そうですよね。もらってもらう前に、ちゃんと、親ごさんにおことわりすればよかったですね」
③かあさんはあやまり、逆らわないで、ふくろを受け取った。
酒を飲むと、ぼくのとうさんは顔が赤くなるが、おじさんの場合は青白かった。

前に、うちへきたときとはちがい、目がつりあがっている。言葉づかいも乱暴なわりには、相変わらず、どこか気弱な感じがつきまとい、まっすぐにかあさんを見ようとはしない。

かあさんもそれを見て取り、おそれるようすはなかった。うしろに立っている川村に目をむけ、気づかうよゆうがある。

おじさんは、ズボンのポケットから、一万円札をわしづかみにして取りだした。

それを受け取れというように、ユラユラと、かあさんの前へさしだしていう。

「ゆかたのクリーニング代だ……これだけありゃ、文句はねえだろう。親切ごかしに連れだして、うちの子に、二度とよけいなことはしねえでくれ」

「わかりました。考えたらずなことをしてしまい、申しわけありません。きょうはもう、時間もおそいし、ちとせちゃんもこまってるみたいだしね。あした、あらためておわびにうかがいますから、どうぞ、このままお引き取りください」

「それは、どういうあいさつだ。おれの金は受け取れねえってか」

おじさんはしつこくせまり、持っていたお札を投げつけた。いきおいあまって足をもつれさせ、その場にくずれ落ちる。

「いいかげんにしてよ、おとうさん！　酔ってなきゃ、なんにもいえないくせに、これ以上、はずかしいことをしないでよっ」

うしろから、大声でさけんだ川村は、おじさんの腕（うで）をつかんで立たせた。

よろけたところをおすようにして、表の道へ連れだそうとする。

ぼくは、ハラハラするだけで、こんなときでもなにもいえなかった。川村のおこった顔は見なれているが、学校にいるときとはちがい、とても悲しそうだった。

「すみません……ほんとに、すみません」

縁側をふりむき、頭をさげた川村は、④なにかいいたそうにかあさんを見た。

それもまたたくあいだのことで、もういちど、ペコッとおじぎをすると、かあさんが口を開く前に、おじさんをおして道へ出ていく。いき場をなくした一万円札が、夜風にふかれて、ひらひらと庭でまいあがった。

浅野竜『シャンシャン、夏だより』より

問一 A ～ D に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア なかなか　イ いったん　ウ ちょくちょく　エ だんだん　オ あたかも

問二 ～～～部a「はにかみ」・b「思いをはせる」の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a「はにかみ」
ア はずかしがって
イ くやしがって
ウ がまんして
エ びくびくして

b「思いをはせる」
ア 思いをはらす
イ 思いをぶつける
ウ 思いをめぐらす
エ 思いをつづる

問三 ――部①「両方のてのひらで、顔をおおって泣きだした」とありますが、それはなぜだと考えられますか。答えなさい。

問四 I に適する言葉を、漢字一字で答えなさい。

問五 ――部②「これは、なんだ」とありますが、ちとせちゃん（川村）の父親は何をおこっているのですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ちとせちゃん（川村）を神社の祭りに連れていったこと。
イ ちとせちゃん（川村）にゴーヤーソーメンを作らせたこと。
ウ ちとせちゃん（川村）にゆかたを持たせたこと。
エ ちとせちゃん（川村）に母親のことを思い出させたこと。

問六 ――部③「かあさんはあやまり、逆らわないで、ふくろを受け取った」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ちとせちゃん（川村）のお父さんに、乱暴されるのではとおそれているから。
イ ちとせちゃん（川村）のお父さんの態度にとても腹をたてているから。
ウ ゆかたをちとせちゃん（川村）にあげたことをこうかいしているから。
エ とても悲しそうなちとせちゃん（川村）を、これ以上悲しませたくないから。

問七 ――部④「なにかいいたそうにかあさんを見た」とありますが、ちとせちゃんはどのようなことを言いたかったと考えられますか。答えなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本中で愛されている和牛のお肉も、日本人の品種改良の①たまものです。

「和牛」と「国産牛」のちがい、みなさんは知っていますか？　じつは和牛を名乗るためには厳しい決まりごとがいくつもあるんです。②和牛の定義は法律でしっかりと決められています。

「和牛」とは日本固有の牛の品種です。具体的には、日本で長い年月をかけて品種改良されてきた黒毛和種、褐毛和種、無角和種、日本短角種の4品種と、それらの交雑種を指します。日本で販売されている和牛の約98パーセントは黒毛和種です。但馬牛、神戸ビーフ、特選松阪牛、米沢牛などの有名ブランド牛も、黒毛和種になります。

和牛と名乗るためには品種のほか、生育環境の決まりもあります。日本国内で生まれ、日本国内で育てられた牛であること、さらにそのことを牛*トレーサビリティ制度で確認できなくてはなりません。

逆に言えばそれ以外の牛は「和牛」ではありません。日本で育てている牛だからといって、和牛を名乗れるわけではないのです。

ちなみに「国産牛」は、品種や生まれた土地は関係ありません。生まれてから出荷までのあいだ、日本で飼育された期間がもっとも長い牛を指します。

牛は繁殖*と肥育を分けておこなわれるのが一般的です。そのため、ニュージーランドで生まれて現地で8カ月育てた子牛を日本に輸入し、20カ月日本で育てれば国産牛を名乗ることができます。

［　A　］、牛肉には日本独自の格付けシステムがあります。「A5ランクの肉」という言い方を聞いたことがある人もいるでしょう。テレビで、「A5ランクの黒毛和牛だから、おいしいんです！」なんてレポートされていることもありますよね。この「A5」が格付けです。アルファベットと数字にはそれぞれ意味があります。

アルファベットは「肉の歩留まり等級」を意味します。歩留まりとは、牛1頭からどれだけの肉がとれるかを表しています。牛肉の格付けでは肉の割合が多い順に「A・B・C」の3段階で表示します。

数字は「肉質」と言われるもので「1、2、3、4、5」の5段階で表します。この数字は次の4項目から決まります。

①脂肪交雑

「霜降り」や「サシ」とも呼ばれる脂肪の度合い。数字が大きいほど脂肪が多いことを表す。

②肉の色沢

肉の色と光沢。鮮やかな赤色で、かつ光沢のいいものほど数字が大きくなる。

③肉の締まりおよびきめ

きめが細かく、肉が締まっているものほど等級が高く、数字が大きくなる。

④脂肪の色沢と質

脂肪は白ければ白いほど数値が高くなる。脂肪が白く、光沢と質もかなり良いものが最高級の5と判定される。

この4項目をひとつずつ5段階で評価して、いちばん低い数字がその肉の格付けとなります。［　B　］、歩留まり等級がAで、肉質等級の4項目が「5、3、5、4」だったとしたら、その肉の格付けは「A3」になります。

どうでしょう？　これで格付けの意味がなんとなくわかったと思います。みなさんは、格付けの意味を知ってどう思いましたか？

僕がこれの意味を理解したときに最初に思ったのは、「格付け＝おいしさじゃないんだな」ということでした。特に肉の歩留まりを表すA・B・Cがそのいい例だと思います。

A・B・Cは、肉の卸売業者さんが市場で肉を買うときの判断材料としては必要な表記ですが、肉を食べる消費者にとってはほとんど関係のないものです。にもかかわらず、「A5」の言葉だけが世間で③ひとり歩きしているような気がします。みなさんのなかにも、A・B・Cを「おいしさの順番」だと思い込んでいる人はいませんか？

格付けだけを基準に牛肉を選んでいる人は、本当にもったいないです！　［　C　］、自分好みの食材を味わって選ぶ楽しさを捨てているようなものだから。

味の好みは［　I　］です。甘みのあってやわらかい霜降り肉が好きな人もいれば、赤身の味としっかりとした歯応えが好きな人もいます。

牛肉のおいしさに正解はありません。また、どの格付けの牛肉も畜産農家さんが手間暇をかけて一生懸命作っていることには変わりはありません。いろいろな格付けの牛肉を自分で食べ比べてみて、自分好みの味を見つけてほしいなと思います。

（中略）

「和牛」の素晴らしさについて見てきました。日本には、ほかにも品種改良によって誕生した優れた農畜産物がたくさんあります。④日本ではなぜ、これほど品種改良がさかんにおこなわれてきたのでしょうか。

理由はいくつか考えられますが、最大の理由は日本の地理的条件にあります。

日本は国土がせまいために広い農地を作ることができず、大量生産ができません。そこで、せまい土地でも毎年安定した量を収穫できるよう、品種改良に力を注いできました。雨に強い品種、暑さや寒さに強い品種、病気に負けない品種、害虫に強い品種などを作り出し、小さな農地でしか農業ができない弱点を克服してきたのです。

たとえば、日本の小麦の作付面積はアメリカのそれに遠くおよびませんが、1平方メートルあたりの収量は日本のほうがずっと多いのです。すごいですよね。これはまさに、品種改良の成せるわざです。

せまい土地でも効率よく、質の高い作物を安定した収量で確保する。そうした努力を続けながら、日本の品種改良は、味の良さを追求することにも力を注いできました。その結果、国内外から高い評価を受けるたくさんの品種が誕生したのです。海外と比べて農地に使える土地が少ないという弱点があったからこそ、日本の品種改良がこれだけ発展していったのです。

白石優生『タガヤセ！日本「農水省の白石さん」が農業の魅力教えます』より

＊ 牛トレーサビリティ制度……牛が生まれてから牛肉として消費者に届けられるまでの情報を追跡（ついせき）確認するためのシステム。ＢＳＥ（牛海綿状脳症）のまん延防止措置（そち）を目的として作られた。

＊ 肥育……牛や豚などの家畜を食用とするために大きく育てること。

問一　――部①「たまもの」・③「ひとり歩き」の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

①「たまもの」

ア　相手に与えるもの
イ　欠点のない完ぺきなもの
ウ　結果として表れたよいもの
エ　ぐうぜんうまれたもの

③「ひとり歩き」

ア　当初の意図と関係なく勝手に動いていくこと
イ　意味がわからないままただよっていること
ウ　自分の力だけで生活していること
エ　他と関係ないものとして受け入れられていること

問二　――部②「和牛の定義」を三点あげなさい。

問三　A ～ C に適する語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　なぜなら　　イ　しかし　　ウ　つまり　　エ　たとえば　　オ　また

問四　I に適する四字熟語を次の中から選び、漢字に直して答えなさい。

いちごいちえ　　じゅうにんといろ　　せんきゃくばんらい　　いちじつせんしゅう

問五　――部④「日本ではなぜ、これほど品種改良がさかんにおこなわれてきたのでしょうか」について、日本で品種改良がさかんにおこなわれてきたのはなぜですか。説明しなさい。

問六　本文で述べられている内容として、**適当でないもの**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　どこで生まれた牛であっても、日本での生育期間が最も長ければ「国産牛」と呼ぶことができる。
イ　牛肉の格付けのアルファベットは、消費者にとってあまり関係ないものである。
ウ　牛肉の格付けはおいしさを示すものではないので、無視するべきである。
エ　品種改良により、日本は1平方メートルあたりの小麦の収量をアメリカより多くすることができた。

三　矢印の方向に読んで、二字の熟語を作るとき、次の[1]～[5]に当てはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

日↓[1]↓栄　→　景
発　→

自↓[2]↓号　→　用
通　→

小↓[3]↓教　→　明
解　→

命↓[4]↓止　→　立
道　→

証↓[5]↓白　→　暗
判　→

四　次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

1　テンケイ的な例をあげる。
2　思いをカンケツに述べる。
3　活動のキョカをとる。
4　リンジ列車を運行する。
5　ソセン伝来の地を守る。